

## Philately と私

聖マリアンナ医科大学 呼吸器外科  
中村 治彦



▶昭和 30 年代はじめ、東京タワー落成に世間が沸いたころ、キャラメルのおまけに外国切手が使われた時代がありました。これがきっかけで、当時の少年達に切手ブームが巻き起こりました。私は小学校に入学する前でしたが、いとこの中学生がストックブックに整理した切手を自慢げに見せてくれました。人気があったのは日本の記念切手でした。どこのデパートの玩具売場でもその一隅に今はすっかり見かけなくなった切手売場があり、少し前に郵便局で売り出されたばかりの切手が額面の何倍もの値段で売られていました。

そのうち、新切手の発売日には郵便局に長蛇の列ができ、小さな郵便局では、人気の高い切手が発売当日に売り切れてしまうこともありました。やがて値上がりを期待したシート単位での購入が普通になりましたが、子供の小遣いでは、一枚ずつ集めるのが精一杯で、家に来た封筒に貼られている切手を水で剥がしてはコレクションに加えていました。切手商の組合が毎年、発行していた切手カタログを眺めては、手持ち切手の評価の変動に一喜一憂しました。なぜか評価の急騰する切手となかなか価格の上がない切手があり、残

念ながら、手元にあるのは評価の低いものばかりでした。そのころの憧れは切手趣味週間に発行された「見返り美人」と「月に雁」で、それぞれ菱川師宣と安藤広重の日本画を原画にした縦長の大型切手でした。ともに発行時の第一種定型封書・基本料金用の切手で、前者は昭和 23 年発行で額面 5 円、後者は昭和 24 年発行で額面 8 円でした。当時の「月に雁」のカタログ評価は 3000 円ぐらいだったと記憶しています。子供にはとても手の届く値段ではなく、まさに高嶺の花でした。思えば、すべて右肩上がりの時代で、日本の人口も生活水準も、ついでに切手の値段もこのまま永久に上がり続けてゆくものと信じていました。

▶値上がりを楽しみに記念切手を集めるのが切手収集だと思い込んでいた私の考えが一変したのは、高校時代の友人に教えられて「日本郵趣協会」という団体に入会してからです。毎月、送られてくる「郵趣」という名の雑誌には、ちょうど学会誌のように切手に関する研究論文や切手展の情報が掲載されていました。この雑誌が入り口となり、切手の奥深さを知りました。日本切手のみでなく

世界各国の切手や、切手に描かれた題材のテーマに着目すれば、アイデア次第でさまざまな遊び方ができます。消印や郵便使用例に注目するのも面白く、これらの要素が加わることで使用済切手が未使用切手より味わい深いものになります。異なる種類の消印が押してあれば、同じ図案の切手でも、異なる切手として扱えるからです。この点で通常切手は記念切手より格段に面白い収集対象です。そのため、ある時点から戦後の記念切手については収集を止めてしまいました。ただし「月に雁」はいまだに幼年期の思い出が残り、使用例だけ集めています(図 1)。ちなみに英語で切手収集を philately、切手収集家を philatelist といいます。使用済の封書や葉書はエンタイヤと称し、切手を剥がさず、まるごと保存することで郵便史的価値が生まれます。子供時代、切手を剥がしてしまわなければ、希少な使用例として通用する郵便物があったかも知れません。

▶私の生まれた神奈川県横須賀市は明治以来、軍港として栄えた町です。私は、日露戦争の勝利を決定的にした日本海海戦で、ロシアのバルチック

ク艦隊を破った旗艦「三笠」が保存されている三笠記念公園の近くにあった幼稚園に通っていました。その関係から司令長官の東郷元帥に親近感を抱いていました。昭和12年5月から、昭和切手シリーズと称する一群の切手が発行されましたが、その中に東郷元帥の肖像があることに興味をひかれ、昭和切手の収集を始めることにしました。収集品の1例をお目にかけます(図2)。第二次昭和切手の中に、最近も首相の参拝をめぐって外交問題となった「靖国神社」の図案があります。額面は17銭で、これは封書基本料金5銭と、速達ないし書留料金の12銭の合計となっています。つまりこの切手は、速達ないし書留封書に、1枚貼れば済むように発行された切手で、料金の適応期間は昭和17年4月1日から昭和19年4月1日の2年間でした。

図2はこの切手を貼って実際に使用した書状を消印の種類別に集めたものです。押された消印はすべて櫛型日付印ですが、C欄と呼ばれる一番下の欄が異なっています。この欄にはAのように本来時刻が入っていたのですが、戦時下の物資不足で簡略化する必要が生じ、さまざまなバリエーションが生じました。Bは切手発行2日目の早期使用例で、C欄には3つの星印があります。本来、郵便物でない為替などに非郵便印として使われていた「三つ星」印を転用したものです。Cは都道府県名をいれたもので、「東京都」の使用例です。Dでは東京都のかわりに「東京府」となっており、1カ月だけの短期使用例で、珍重されています。このように、興味のない人に

はどうでもよい些細な違いに着目し、分類、収集して面白がっているのがphilatelistなのです。

▶自分が生まれた昭和という時代がまさに激動の時代であったことが、昭和切手を集めることではっきりと見えてきます。発行順に第一次から三次まで、3シリーズに分類されますが、ほとんどが軍国主義と国威発揚を象徴する図案で構成されています。切手の紙質や印刷の質は戦況の悪化、物資の欠乏とともに次第に粗悪になり、昭和20年から発行された三次昭和シリーズではついに裏糊も目打ちも消え、紙は粗末な藁半紙のようになります。消印が磨耗しても新しく補充されないため、使用例では消印の地名や年月日のデータが読めないものがほとんどで、収集家泣かせです。このころの郵便料金は戦中から戦後にかけてのインフレで、すさまじく上昇し、昭和12年から24年までの12年間で、封書料金が4銭から8円へ、200倍も値上がりしました。現行の封書80円は平成6年1月から値上げされることなく15年間続いていますから、経済成長が見込めなくなった分、物価が安定しているといえるでしょうか。

終戦を迎えると進駐軍による統制が始まり、国家主義をあらわす図案は、追放切手として、昭和22年9月1日以降は使用禁止となります。終戦を境に日本は全体主義国家から、アメリカの主導によってもたらされた民主主義国家へと少なくとも表面上は劇的に変化し、これは切手の図案にも反映されました。戦後初めて発行された新昭和切手シリーズの図案は、日本の郵便制度に尽力した前

島密や、葛飾北斎の絵、古来の建築物などへ一新されます。続いて、農婦、炭鉱夫、印刷女工など働く人を図案化した産業図案シリーズへと引き継がれていきます。

▶現在、郵政民営化によって郵政省は消滅し、正確には国家事業として切手が作られることはなくなりました。今となっては昭和切手が、国をあげて戦争を推進した暗い時代の証人として残っているばかりです。子供時代に、「おまけ切手」の洗礼を受けた世代はいわゆる団塊の世代に続く10年ぐらいまでと思われれます。そのごく一部に私のように細々と切手収集を続けるものが残っているでしょう。現在では切手収集をしている子供は見かけなくなりました。本来は大人の趣味であり、全国津々浦々の子供が切手に夢中になっていた時代がむしろ特異であったと思います。多くの人がシート買いしていた記念切手の値段が現在どうなったかといえば、カタログ評価はさておき、昭和35年以降に発行された記念切手を売ろうとしてもほとんどが額面価格を割っています。過去の未使用記念切手が市場に大量に出回り、品物が有り余っているからです。業者が額面の一割引き程度で引き取っているのが実情のようです。つまり、わが家に眠っている記念切手にはプレミアがまったくつかず、郵便物に貼って使用してしまうのが一番無難ということになります。戦後何十年にもわたり大量に発行され続けた記念切手は旧郵政省の財源を潤しただけで、骨董的価値がないものに委容してしまったようです。



図1 月に雁

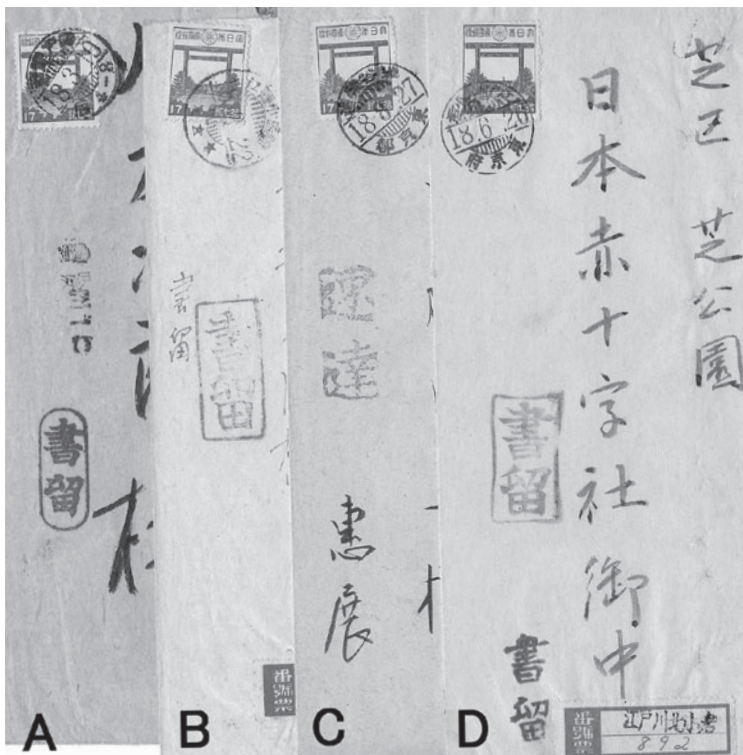


図2 消印の種類別に収集した切手の例